

令和5年度 **国** **語** (50分)

## 注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけない。
- 2 この問題冊子は32ページである。  
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始の合図前に、監督者の指示に従って、解答用紙の該当欄に以下の内容をそれぞれ正しく記入し、マークすること。
  - ・①氏名欄  
氏名を記入すること。
  - ・②受験番号、③生年月日、④受験地欄  
受験番号、生年月日を記入し、さらにマーク欄に受験番号(数字)、生年月日(年号・数字)、受験地をマークすること。
- 4 受験番号、生年月日、受験地が正しくマークされていない場合は、採点できないことがある。
- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークすること。例えば、



と表示のある解答番号に対して②と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の②にマークすること。

(例)

解答番号	解 答 欄				
10	①	②	③	④	⑤

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってよい。

国語

解答番号

1

）

22

（

1

次の問1～問5に答えよ。

問1 傍線部の漢字の正しい読みを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 1。

交通ルールを遵守する。

- ① てんしゆ
- ② そんしゆ
- ③ げんしゆ
- ④ こしゆ
- ⑤ じゆんしゆ

問2 (ア)、(イ)の傍線部に当たる漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は 2・3。

(ア) カクウの都市を舞台とした小説。

2

- ① ショカに本を戻す。
- ② ケイカを観察する。
- ③ 商品のカカクを調べる。
- ④ 外出をキョカする。
- ⑤ 原料をカコウする。

(イ) ピアニストがセンサイな音楽を紡ぎ出している。

3

- ① シンセンな魚を食べる。
- ② 食物センイを摂取する。
- ③ ガスのモトセンをしめる。
- ④ 左方向にセンカイする。
- ⑤ 選手センセイをする。

問3

空欄に言葉を補うと、「一風変わったことをして見せびらかす」という意味になる。空欄に入る言葉として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 4。

奇を

- ① なげる
- ② さそう
- ③ さわる
- ④ てらう
- ⑤ かりる

問4 敬語を、次のA～Cのような三つの種類に分けた場合、「うかがう」と「いらっしゃる」という語はそれぞれの種類に入るか。最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 5。

A	「御覧になる	お持ちになる	おっしゃる
B	「拝見する	お持ちする	申す
C	「見ます	持ちます	言います

- ① 「うかがう」、「いらっしゃる」ともにAに入る。
- ② 「うかがう」はA、「いらっしゃる」はBに入る。
- ③ 「うかがう」はB、「いらっしゃる」はAに入る。
- ④ 「うかがう」、「いらっしゃる」ともにBに入る。
- ⑤ 「うかがう」、「いらっしゃる」ともにCに入る。

問5 「河川」と同じ構成で成り立っている熟語を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 無人
- ② 完全
- ③ 大河
- ④ 左右
- ⑤ 日没



## 2

東高校の合唱コンクール実行委員会では、先月実施した合唱コンクールの事後アンケートをもとにして、次年度の合唱コンクールの改善案を検討することになった。合唱コンクール実行委員会委員長の鈴木さんは委員会の打合せ用に【連絡メモ】を作成し、他の実行委員と話し合いを行った。この時の【連絡メモ】と【話し合いの一部】を読んで、問1、問2に答えよ。

## 【連絡メモ】

## 次年度の合唱コンクールに向けての 検討事項

- 1 優劣を競うのではなく、みんなで楽しむものとするために、合唱コンクールから合唱祭にしてはどうか。  
→今年度の「合唱コンクール事後アンケート」で多くの指摘があった内容。
- 2 開催を11月ではなく、9月にしてはどうか。  
→11月だと、定期試験が近いので練習の時間が確保しにくい。夏休みを挟めば、練習時間が確保できる。(先生方にも相談済み)
- 3 課題曲をやめて、自由に曲を選べるようにしてはどうか。  
→指定された課題曲だとモチベーションが上がらない。自分たちで好きな曲を選びたい。(上記アンケートの自由記述から複数指摘されていた意見)

### ※先生への報告

→来週の水曜日放課後までに実行委員会の意見をまとめて、先生に報告することができるようにしたい。

【話合いの一部】

鈴木さん 「今から次年度の合唱コンクールについての話合いを始めます。みなさん事前に『連絡メモ』は見てくれていますよね。そこにある通り、検討事項は三つです。」

後藤さん 「学年ごとの課題曲ではなくて、自由に曲を歌えるようにするのですね。今年歌った曲は難しかったから、歌いたい曲が歌えてうれしいです。」

森さん 「そうですね。今年の課題曲は、難しかったからこそ歌えた時に達成感があったと思います。同じ曲だからこそ、クラスごとに表現の差があつて面白かつたのではないのでしょうか。それに自由曲になったら、曲を決めることに時間を取られてしまうのではないかとということが心配です。練習時間が減ってしまいませんか。」

山田さん 「たしかに、好きな曲が歌えると言つても、それぞれ好みは違うから、結局は歌いたくない曲を歌う人が出てくるのは同じでしょう。課題曲でも自由曲でも、練習を重ねると愛着が湧くとは思いますが、どちらにせよ、練習時間を確保するのは大変ですよ。」

伊藤さん 「私は『連絡メモ』の、優劣を競うのではなくという記述が気になります。合唱コンクールではなくて、合唱祭になった場合は、順位を決めないということでしょうか。もしそうなら、私は合唱コンクールを合唱祭にするのは反対です。」

鈴木さん 「詳細はまだ決まっています。この話合いで出た意見をまとめて先生に報告したいと思います。」

伊藤さん 「みんなで楽しむことも大切だけど、せっかく練習したのだから成果を評価してもらいたいという気持ちをもみんな持っていると思います。」  
 A  
 永野さん 「私は、合唱コンクールは、クラスごとに団結をして優勝を目指すからこそ、やりがいがあつたように思います。合唱コンクールではなく、合唱祭にするメリットをもう少し知りたいです。」

山田さん 「では、これまでの話で出た合唱祭にするメリットをまとめてみませんか。後藤さんが言うように、好きな曲を歌えるということですよ。」  
 B

森さん 「山田さんがまとめてくれたことを考えると、そこまで大きなメリットがある気がしません。次年度も例年通りでいいのではないのでしょうか。」

永野さん 「森さんの意見には賛成できません。大事な学校行事だし、少しでもよくなるなら、しっかり話し合つてよりよいものに変えていくべきです。」

後藤さん 「【連絡メモ】にあったように、開催時期の変更はするべきだと思います。定期試験のすぐ後だった十一月から変更になり、夏休みの後になるのですよね。それなら、夏休み中にしっかり自主練習の時間を確保できると思います。」

伊藤さん 「そうですね。しっかり自分でも練習してから、クラスのみんなと声を合わせたいです。」

鈴木さん 「では、開催時期の変更について、委員会としての意見をまとめますね。開催日の変更に賛成の方は挙手をお願いします。」(挙手の人数を数える。)

「続いて反対の方は挙手をお願いします。」(挙手の人数を数える。)

「はい、ありがとうございます。変更賛成の方が多数ということですね。それでは他に意見がありますか。」

森さん 「すみません。他にも気になることがあります。【連絡メモ】にはありませんが、コンクールでないとしたら、審査員など必要なくなるのでしょうか。私は吹奏楽部なので、運営のお手伝いをするからいろいろと気になるのですが。」

鈴木さん 「気になること全てについて話し合うと、来週の先生への報告に間に合わなくなってしまうので、今回は、【連絡メモ】にある検討事項について話を進めませんか。」

後藤さん 「そうですね。運営方針が決まってから森さんの気になることを確認しましょう。」

森さん 「分かりました。よろしくお願いします。」

鈴木さん 「では、改めて【連絡メモ】にある残り二つの検討事項について意見がある人はいませんか。」

永野さん 「残りの二つですが、コンクールにするか合唱祭にするかと、課題曲か自由曲かは一緒に考えたらどうでしょうか。コンクールにするなら、課題曲のほうが評価もしやすいだろうし、曲選定の時間も練習に回せます。一方で、合唱祭にするなら、好きな曲を選び、楽し

みながら練習できると思います。」

伊藤さん 「そんな風に考えたら、意見をまとめることができますね。」

山田さん 「その考え方なら、話がまとまりますね。他のみんなはどうですか。」

森さん 「賛成です。」

後藤さん 「私も賛成です。」

鈴木さん 「みんな賛成のようですね。では、永野さんの考えに沿って、この後考えていきましょう。」

問1 【話し合いの一部】において、傍線部A～Eのそれぞれの発言について説明したものと最も適当なものの組合せを、後の①～⑤のうちから

一つ選べ。解答番号は 7。

- ア 傍線部Aで、伊藤さんは自らの意見の根拠を客観的に示し、説得力のある意見を述べたことで賛同を得ている。
- イ 傍線部Bで、山田さんは他の人の意見と自分の意見の相違点をまとめて相対化した上で、反対意見を述べている。
- ウ 傍線部Cで、後藤さんは自らの意見を示した上で、自分がどのように考える理由を述べている。
- エ 傍線部Dで、森さんは他の人の意見を積極的に受け入れて、話し合いが円滑に進むように新たな検討事項を提案している。
- オ 傍線部Eで、永野さんは今後の話し合いの方向を提案し、そう提案した理由を説明している。

- ① ア・ウ
- ② ア・エ
- ③ イ・エ
- ④ イ・オ
- ⑤ ウ・オ

問2 【話し合いの一部】における実行委員会での話し合いについて説明したものと最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 次回の打合せに向けて、次年度の合唱コンクールに向けての三つの検討事項に回答することの賛否を決める話し合いであった。
- ② 次回の打合せに向けて、課題曲をやめて自由曲にするという新たな議題を見出すための話し合いであった。
- ③ 次回の打合せに向けて、次年度の合唱コンクールに向けての三つの検討事項について委員の意見をまとめつつ、検討の方向性を確認した話し合いであった。
- ④ 次回の打合せに向けて、次年度の合唱コンクールに向けての三つの検討事項よりも、審査員の有無や、吹奏楽部の運営の手伝いについて重点的に検討した話し合いであった。
- ⑤ 次回の打合せに向けて、審査員を頼むか頼まないかという対立する意見をそれぞれに深めていく話し合いであった。

3

南高校の橋本さんは、【南高校生徒会からのお知らせ】に対して国語の時間に学んだ【意見文の書き方の例】に従い、意見文を書くことになった。【橋本さんの意見文(第一段落)】は、【意見文の書き方の例】の「①」として橋本さんが書いたものである。これらを読んで、問1、問2に答えよ。

【南高校生徒会からのお知らせ】

来年度の8月から3月にかけて、校舎の改築工事が行われます。具体的には、新棟(特別教室棟)と旧棟(教室棟)の2棟からなる現在の校舎のうち、旧棟が工事対象となります。旧棟にあるすべての教室が使えなくなるため、校庭にプレハブで仮設校舎が建てられる予定です。そのため、工事期間中は校庭も使うことができなくなります。

現在南高校では、生徒会が主催する大きな行事として、9月の文化祭と11月の体育祭があります。みなさんも御存じの通り、どちらの行事も校舎や校庭を使って行われるものです。先生方に確認したところ、来年度にこれらの行事を行うとしたら、実施が可能である時期は、改修工事が始まる直前の7月だそうです。ただし、7月に両方の行事を行うことは日程の関係でできないため、どちらか一つに絞って実施するしかないそうです。

そこで、生徒会では、みなさんの意見を聞きながら、来年の7月に文化祭と体育祭のどちらを行うかについて、日程と予算の面から先生方と検討していきます。来年度、7月に行うことになる生徒会主催行事は一つになってしましますが、その分、集中して取り組み、思いきり盛り上げていきましょう。

【意見文の書き方の例】

①…課題文を読み、課題文に対する意見を書く。

②…①で書いた意見の根拠を書く。

※二段落構成とするなら、初めの段落には「意見」を、次の段落には「根拠」を書くようにしよう。

【橋本さんの意見文(第一段落)】

来	年	の	七	月	に	文	化	祭	と	体	育	祭	の	ど	ち	ら	を	行	
う	か	に	つ	い	て	、	生	徒	会	は	「	日	程	」	と	「	予	算	」
の	点	か	ら	先	生	方	と	話	し	合	っ	て	検	討	す	る	方	向	を
示	し	た	。 だ	か	ら	私	は	検	討	の	視	点	が	不	足	し	て	い	
る	。 「	優	先	し	て	運	営	方	法	を	引	き	継	ぐ	べ	き	行	事	
は	ど	ち	ら	な	の	か	」	と	い	う	視	点	か	ら	の	検	討	も	必
要	で	は	な	い	だ	ろ	う	か	。										

問1 【橋本さんの意見文(第一段落)】の傍線部はどのように修正するとよいか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

9。

- ① 「だから」を「だが」にし、文末を「〜と考える」にする。
- ② 「だから」を「その上」にし、文末を「〜と考える」にする。
- ③ 「だから」を「だが」にする。
- ④ 「だから」を「その上」にする。
- ⑤ 「だから」を「つまり」にし、文末を「〜のである」にする。

問2 【意見文の書き方の例】に照らして考えた場合、橋本さんの意見文の第二段落として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解

答番号は 10。

①

なぜなら、生徒会が文化祭や体育祭を主催してこられたのは、行事を運営するやり方が継承されてきたことによると考えるからだ。しかし、来年はどちらか一つしか実施できない。つまり、来年中断された行事の運営のやり方は一年間引き継がれないことになる。それならば、今のうちに両方の行事の運営のやり方を文書にまとめておくべきである。このようなことから、私は、両方の行事の運営のやり方を文書にして引き継ぐべきという視点からも検討するべきだと考える。

②

なぜなら、今まで文化祭と体育祭が盛大に行われてきたのは、行事の運営の仕方が、上級生から下級生へと伝わってきたことによると考えるからだ。そのようにして代々受け継がれてきたものは、南高校の「財産」である。しかし、来年はその「財産」が一つしか伝わらない危機にある。この点を生徒全員で認識するべきだ。このようなことから、私は、南高校の生徒会行事が存亡の危機にあるという視点からも検討するべきだと考える。

③

なぜなら、私は今年実行委員として文化祭と体育祭の運営に携わったことで、運営全般に関するコツをたくさん学んだからだ。私が知り得た文化祭と体育祭の運営のコツは、来年度以降の運営においても必ず役に立つと思うので、ぜひとも下級生に伝えたい。このようなことから、私は、今年の文化祭と体育祭の運営のコツを引き継ぐという視点からも検討するべきだと考える。

④

なぜなら、文化祭と体育祭を生徒会主催でこれまで盛大に実施できたのは、生徒間でその運営のノウハウが脈々と受け継がれてきたことにあると考えるからだ。もし、ある行事の運営のノウハウの継承が途絶えれば、その行事を従来通りに実施することは困難になるかもしれない。このようなことから、私は、南高校の生徒会主催行事として、運営のノウハウを確実に引き継がなければならぬものはどちらなのかという視点からも検討するべきだと考える。

⑤

なぜなら、文化祭や体育祭においては、運営する側はもちろん大変であるが、実は参加する側の負担も大きいという現状があるため、行事の運営方法と行事のあり方の両方を見直すことが必要だと考えるからだ。現在受け継がれている行事の運営方法をそのまま次の代に引き継ぐだけでは、私を感じているこの問題は解決しない。このようなことから、私は、行事の運営方法と行事のあり方をとるに見直した結果を次代に引き継ぐという視点からも検討するべきだと考える。



4

次の文章は、以前地元の弓道会が主催した弓道の体験教室に参加したものの入会するかどうか迷っていた高校生の矢口楓<sup>やぐちかへで</sup>が、そこで知り合った同じ高校に通う真田善美<sup>さなだよしみ</sup>に半ば強引に誘われて弓道会の練習に参加した場面である。これを読んで、問1～問6に答えよ。

更衣室の鏡に、自分の姿が映っている。弓道着を身に着けた自分は、きりつとしてカッコいい。優柔不断で人見知りには、とても見えない。

「素敵。まるで弓道アニメのコスプレしてるみたい」

正直な感想を言うと、<sup>(注1)</sup>久住は再び笑った。

「そうね。ふだんはこんな服着ないものね」

更衣室を出ると、楓の姿をみつめて、ほかの人たちも集まって来た。

「楓ちゃん、お久しぶり」

真っ先に声を掛けてきたのは、<sup>(注2)</sup>小菅だ。小菅も弓道着を着けている。

「入会することにしたのね。よかった」

「いえ、まだ見学だけなんです。あの」

言い掛けた時、横から声が出た。

「もしかして、あなたも高校生？」

声の主も若い。弓道着を着ているから落ち着いて見えるが、「あなたも」と言うからは自分も高校生なのだろう。髪は楓と同じくらいの長さだが、結んではない。日に焼けて浅黒く、生き生きとした目が印象的な少女だ。

「はい。高校一年です」

「わ、嬉しい！ タメだ。私、<sup>(注3)</sup>山田光、よろしくね」

「矢口楓です。よろしく。<sup>A</sup>でも」

まだ入会していない、と説明しようとしたら、後ろから別の声がある。

「あ、きみ、やっぱり来たんだね」

体験教室に楓を誘ったイツヤ<sup>(注4)</sup>という少年だ。イツヤも嬉しそうな顔をしている。

「妹がそのうち連れてくるって言ってたからさ。待ってたんだ」

「妹？」

「きみ、善美と同じ学校なんだろう？」

つまり、イツヤの妹というのは、真田善美のこと？ 妹が連れてくると言っていたことは、今日会ったのは偶然ではなく、彼女は機会をうかがっていたってこと？

「えっと、つまり、あなたは真田善美さんのお兄さん？」

「そう。あれ、自己紹介してなかったっけ？」

「ええ。そういえば、名前も聞いてなかった」

なんとなく顔見知りになったので、お互いちゃんと名乗ったことはない。名前を聞いていたら、すぐに兄妹だとわかっただろうに。

「そうだっけ。ごめんね。いまさらだけど、僕は真田乙矢(注5)。弓道で言うところの甲矢乙矢(注5)の乙矢と書いてイツヤと読むんだ。あなたは矢口さんだっけ？」

「矢口楓です」

自分が彼女になりたいわけではないが、イツヤと善美がカップルでないと知って、なぜか浮き立つような気持ちになっている。

「そう、これからよろしくね」

乙矢のにこっと笑った顔がまぶしくて、『見学だけです』とは言えなくなった。

「カエデ、お久しぶり」

ちよつと癖のあるイントネーションで話し掛けてきたのはモローだ。(注6) あいかわらず寝ぐせがついている。

「わ、モローさん、私を覚えていてくれたんですね。それに、弓道着、とても似合っています」

「カエデも似合ってますよ。また、いっしょに練習できて嬉しいですよ」

モローも新しい弓道着に身を包んでいた。茶褐色の髪に瞳の色は緑だが、違和感はない。サイズがあっていれば、弓道着は誰にでもしっくりくるものだな、と楓は思う。

その時、モローの後ろで弓を張ってる善美が目に入った。楓ははっとした。善美はジャージ姿だ。弓道着をまだもっていないらしい。

<sup>B</sup> この弓道着、真田さんが着た方がいいんじゃないだろうか。浮き立っていた楓のころがちよつとしぼんだ。

「真田さんは私より十センチは背が低い。きっとこの弓道着は彼女には大きすぎるんだろう。もし、彼女に合うなら、久住さんも彼女にこれを着せただけど、会員でもない私がこれを着て、真田さんがジャージっておかしくないだろうか。なんで彼女はジャージなんだろう。まさかお金が無くて買えないんじゃないよね。」

後ろめたい気持ちを抱えながら弓を張ったり、カケを着けたりして準備していると、久住が号令を掛けた。

「新人の皆さんは、こっちに来てください」

そうして楓たちは道場の壁にある、丸いものの前に来た。藁を束ねて的状にしたもので、巻藁まきわらというのだそう。巻藁の傍には全身が映る鏡が置かれている。

「巻藁の練習は、弓を射る時の正しい姿勢を身につけるためのものです。上段者になっても、巻藁で自分の姿勢をチェックするのは欠かせません」久住が楓に説明する。巻藁の練習では実際に矢を射るが、専用の矢を用いる。矢羽やばねはついておらず、先もとがっていない。

巻藁はふたつあり、それぞれに指導者がついて新人たちの練習をチェックしている。

「ちよっと間が空いたけど、射法しやほう八節はつせつは覚えてるかしら？」

楓が最初に並んだ巻藁の傍には久住がいた。もう一方には隅田すみだが付いていて、モローを指導している。

「えーっと、少しだけ」

「じゃあ、思い出しながら、順番にやってみましょう。まずは足踏み。覚えているかな」

巻藁まで二メートルくらいのところに、的と垂直になるよう、横向きに立つ。弓は左手に、矢は右手に持ったまま、それぞれ腰のところに手を当てる。

そして、その姿勢を保ったまま、足を左右に開く。これが「足踏み」。

矢をつがえて弓の下部を左膝頭に寄せ、姿勢を正し、呼吸を整える「胴造りどうづく」。

右手の親指を弦に掛けて矢を支ささえ、左手で弓を握り、顔を的に向ける「弓構えゆがま」。

顔は的に向け、両手を水平に保ったまま弓を上にあげる「打ち起こし」。

弓を左右に押し開く「引き分け」。

その姿勢で身体のバランスを整え、狙いを定める「会」。

矢を発射する「離れ」。

矢を放った後、しばらく姿勢を保つ「残身」。

これが射法八節だ。的前まじまえに立って矢を放つ、そのシンプルな動作のひとつひとつにこんな風に名前がついている。時間にしてわずか一分とか二分のことだ。

「これが弓道の基本の型です。このひとつひとつがちゃんとできていけば、自然と矢は正しいところに向かいます」

「なんだか難しいですね。こんなに細かくやるのが決まってるなんて」

楓が感想を言うと、久住はにっこり笑う。

「ほかのスポーツと違って、弓道は初心者でも上段者でも、この射法八節を正しくやる、それに尽きるんです。だから、一度手順を覚えてしまえば、いちいち考えなくても自然と身体が動くようになります。同じことを繰り返して、型を身体に染み込ませるんです」

「誰が、この射法八節を考えたんですか？」

楓が聞くと、久住はびつくりした顔をしたが、すぐに笑顔になった。

「誰でしょうね。私も知らないから、今度調べておくわ。たぶん、戦後弓道を体系化した時にまとめられたものだと思うけど」

「ふーん、意外と新しいんですね」

「そうね。でも、いま弓道をやっている人はみんなこの射法八節を練習してきたんですよ」

「みんな同じことを？」

「そう。型っていうのは、それがいちばん合理的で、無駄がなく、美しい動きなの。この中には先人の意志や智恵ちえが息づいているの。射法八節という言葉でまとめられたのは新しいかもしれないけど、その動き自体はおそらくずっと昔からあったと思う」

そう言われて、ふいに楓の頭の中に、武士が矢を射るイメージが浮かんできた。鎧兜よろいのかぶとを着けた武士が馬上から狙いを定めて、スパーンと矢を放つ。イメージの顔はなんとなく乙矢に似ている。

「弓道をやるとことは、その伝統を受け継いでいくってことなのよ」

「それって……ロマンチックかも」

久住は再びにっこり笑った。

「そう思ってもらえたら、嬉しいわ。できれば矢口さんにも、その伝統を受け継いでほしい」

久住が暗に入会を勧めている、と思った。返事のしようがなくて、楓は黙ってしまった。

結局、その日は新人たちは的前で練習はしなかった。ただひとり、善美だけは後半は的前に移って練習するように指導者に言われたが、それ以外の無段の人間は、最後まで巻藁の前を動かなかった。

それでも、楽しいと楓は思った。体験教室の時は、与えられる課題をただこなすだけで精一杯だった。だが、いまは違う。身体がやることをわかっている。単純な動作の繰り返し返したが、それが意外とおもしろい。同じことを繰り返しているようで、毎回少しずつ違う。ほんのちよつとの手首の動かし方や力の入れ方で矢の向きが変わる。より正しく、より大きく引こう、ということだけに集中していると、あつという間に時間が過ぎていった。

練習時間の最後の一五分、という頃に、<sup>(注9)</sup>前田が宣言した。

「これから、歩く練習をします」

全員が弓と矢を持って、射場の端の方に集まった。そして、上段者が先に立って、射場の中を歩き始めた。新人たちは後ろの方、楓は列の最後尾に ついた。前との間隔を空け、ふつうに歩き出すと、たちまち前田の声が飛んできた。

「あ、ちよつと待って。あなた、全然違う」

どうやら、楓のことを言ってるらしい。楓は困惑して立ち止まった。

「ああ、あなたは初めてだったわね。ちよつと久住さん、お手本見せてもらえる？」

久住が左手に弓、右手に矢を持った執弓しやくゆみの姿勢を取ると、そのまま歩き始める。足をほとんどあげず、スーッと、スーッと身体全体で前に進んでいく。楓が学校で習ってきたような、左右の手を勢いよく振り、足を膝まで上げる、というような行進の歩き方とはかなり違う。時代劇みたいな、ちよつと不自然な歩き方だ。

「歩く時、足の裏を見せてどしどし歩いてはいけません。足はすり足で。前に出る時には、重心を真ん中に置いて、腰から自分を前に移動させるつもりで動いてください」

久住の説明が終わると、前田は手を叩いて「一、二、一、二」と号令を掛ける。そのタイミングに合わせてみんなは歩き出す。射場の壁に沿って、長方形を形作るように歩いて行く。楓もなかなかうまく歩けないが、モローはもつと下手だった。妙に足の動きがぎくしゃくしている。

「足、揃そろってない。一、二、一、二」

楓は前に立ってる小菅の足下を見て、それに合わせようとした。すると、前田の声が飛んでくる。

「矢口さん、背中を伸ばして」

いけない、いつもの癖だ、と楓は思う。猫背になりがちなので、母によく注意されるのだ。楓は背中を緊張させた。

「そう、視線は床の三メートルほど先に向けるようにね」

一、二、一、二、と続け、リズムに乗ってきた。みんなの足も揃っている。だんだん楽しくなってきた、と思ったところで、  
「はい、今日はここまで」

と、声が掛かった。歩く練習は時代劇の人になったみたいで、ちょっとおもしろかった。それで、その日の練習は終わった。

その後、更衣室に行つて、セーラー服に着替えた。楓は着ていた弓道着を畳むと、和室にいる久住に尋ねた。

「あの、練習着、ありがとうございます。これ、洗濯してきましようか？ 家でも洗えますか？」

「ああ、これあなたに差し上げます」

「えっ、いいんですか？」

D 「これを寄付してくれた人も、サイズが合う人にかけてほしい、と言つてたし、あなたにぴったりだったし」

「でも……」

「これを包んでいた風呂敷を貸してあげるわ。こちらは、次の時に持ってきてくださいね」

次があるのだろうか。まだ入会する、と決めたわけではない。練習は楽しかったけど、こんな風になし崩し的に決めていいのだろうか。

その迷いを、小菅と光の言葉が断ち切った。

「よかったね、ほんとそれ、似合ってたわ」

「いいな、最初から弓道着で練習できるなんてラッキーだよ」

ふたりが喜んでくれるのをみて、ふいに、これでいいんだ、という感情が湧いてきた。これだけ親切にしてもらったんだし、断るのも意地っ張りな気がする。練習は楽しかったし、またここに来てもいい。

「どうします？ やっぱり弓道が続けるのは難しい？」

久住が心配そうに尋ねる。

「いえ、大丈夫です。次から練習に参加します」

楓の言葉を聞いて、「やったー」と声を上げたのは、乙矢だった。<sup>(注10)</sup>「ジュニアがまたひとり増える」

「えっ、彼女、最初から入会するつもりじゃなかったの？」

何をいまさら、と言うように、光があきれた顔をしている。

「一緒に頑張りましたよね」

小菅が楓の手を握った。その手のぬくもりに、楓のこころはほんのり明るくなる。どうせ放課後の自分には居場所がなかったのだ。こんな風に歓迎してくれる場所があるならそれでいい。ここが自分の居場所になる。

<sup>E</sup>

(碧野圭『凜として弓を引く』による。)

(注1) 久住——弓道会の指導者。

(注2) 小菅——楓と共に体験教室参加後、弓道会に入会した。

(注3) 山田光——弓道会のジュニア会員(中高生の会員)。

(注4) イツヤ——真田乙矢。弓道会のジュニア会員(中高生の会員)。

(注5) 甲矢乙矢——二本の矢のうち、初めに射る矢を甲矢、二番目に射る矢を乙矢という。

(注6) モロー——楓と共に体験教室参加後、弓道会に入会した。

(注7) カケ——<sup>ゆがけ</sup> 蹠の通称。矢を射る時、右手にはめる手袋のようなもの。

(注8) 隅田——弓道会の指導者。

(注9) 前田——弓道会の責任者。

(注10) ジュニア——ジュニア会員のこと。

問1 傍線部A でも とあるが、このときの「楓」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 弓道着を着てもなお入会するという決断が出来ず、いつまでもふんぎりがつかないでいる自分に嫌気がさしている。
- ② 周囲から好意的に声をかけられるがうまく反応できず、初対面の相手となかなか打ち解けられずにいる。
- ③ 弓道会の仲間が自分の周囲に集まってくる状況に居心地の悪さを感じて、早くその場から逃れようとしている。
- ④ 周囲からはすでに入会したものととして次々と話しかけられ、入会を決めかねているのに言い出せないままでいる。
- ⑤ 弓道会の仲間の明るさや弓道への情熱と自分の気持ちとの落差を感じて、この会でやっていけないのかという不安を感じている。

問2 傍線部B 浮き立っていた楓のところがちよつとしぼんだ。 とあるが、このときの「楓」の心情を説明したものとして最も適当なものを、次の

- ①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 乙矢と善美が兄妹であることを知って理由もなく心弾んでいたが、ジャージ姿の善美を見て、会員でもない自分が善美より先に弓道着を着ていることに気づき、やましさを感じ始めている。
- ② 弓道会のみんなが自分のことを覚えていてくれたことを知って心が明るくなったが、善美が弓道着を着ていないことを見て、自分ばかりが浮かれた気持ちになっていることを恥ずかしく思っている。
- ③ 漠然と異性として気になりだしている乙矢の笑顔に触れて嬉しさを感じていたが、弓道着を着て乙矢の隣に立つのは、先に入会していてもある善美の方がふさわしいのではないかと疑問を抱いている。
- ④ 乙矢が善美と兄弟であることを知って訳もなく陽気な気持ちになったものの、善美が弓道着を着ていないことから、複雑な家庭環境を心配しつつも、それを聞き出すのはばかられて悩んでいる。
- ⑤ 新しい弓道着は誰が着ても自然となじむものだと思って心躍ったが、自分より先に入会している善美がジャージ姿のままであるのを見て、自分だけが弓道着を着られていることに気がとがめている。

問3 傍線部C 久住はびつくりした顔をしたが、すぐに笑顔になった とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一

つ選べ。解答番号は 13。

- ① 楓が弓道の基本的な姿勢を軽んじるような発言をしたことに強い衝撃を覚えつつも、彼女を入会させるために笑顔で取り繕って本心を隠したかったから。
- ② 楓が弓道経験者の自分でも考えたことがないようなことについて質問をしてきたので意表を突かれたが、弓道に興味を持ち始めてくれたことを嬉しく感じたから。
- ③ 楓が質問をしてきた基本的な事柄さえ答えられず、自らの知識の浅さを痛感しながらも、その動揺を気付かれないように笑顔でごまかそうとしたから。
- ④ 楓があまりにも単純で誰でも知っているような質問をしてきたことにあきれたが、いかにも初心者らしい質問をする楓にはほえましさを感じたから。
- ⑤ 楓が入会を迷っていないながらも積極的に質問してきたことを意外に感じてはいるが、笑顔で優しく対応することで自分を印象良く見せたかったから。

問4 傍線部D「でも……」とあるが、このときの「楓」の心情を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答

番号は 14。

- ① 弓道会への入会を決めたわけではないのに、最初から弓道着を着用して練習できたため自分は特別な存在であると思われることに重圧を感じている。
- ② 弓道会への入会を決めたわけではないのに、自分のサイズにぴったり合う弓道着が見つけれただけで入会を強制されていることに憤りを感じている。
- ③ 弓道会への入会を決めたわけではないのに、ただサイズが合うというだけで弓道着をもらうことになってしまうことに対して戸惑いを感じている。
- ④ 弓道会への入会を決めたわけではないのに、わざわざ自分に合う弓道着を用意してまで自分を迎え入れようとする必死な姿勢を負担に感じている。
- ⑤ 弓道会への入会を決めたわけではないのに、善美が着るはずの弓道着を受け取ることに申し訳なさを覚え、どう弁解すれば良いか困惑している。

問5 傍線部E 自分が自分の居場所になる。とあるが、ここに至るまでの「楓」の心情の変化を説明したものととして最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 最初は見学のためだけに弓道会を訪れたが、久住など弓道会の人たちから親切にされ、自分を迎え入れてくれる人々や仲間たちがいるという目の前の現実を素直に受け入れていこうという気持ちになった。
- ② 最初から弓道に対して憧れはあったが、善美や乙矢などのメンバーと一緒に練習に励んでいくうちに楽しさを感じるとともに、弓道の洗練された作法に魅力を感じ、自分には弓道しかないという気持ちになった。
- ③ 最初は弓道会の厳しい練習に反発していたが、久住から基本的なことを丁寧に教えてもらっていくうちにわだかまりがなくなるとともに、弓道の作法には伝統があることを知り、伝統を受け継ぐものは自分だという気持ちになった。
- ④ 最初は弓道の練習に暇つぶしのつもりで参加したが、善美の真剣に練習に打ち込む姿を見るうちに自分でもやってみたいと思うとともに、単純動作を繰り返すだけなら自分にもできると感じ、本気でやりたいという気持ちになった。
- ⑤ 最初は弓道会の練習への参加に消極的であったが、久住から弓道の歴史や技術を学んでいくうちに興味が湧いてくるとともに、同年代の會員からも頼りにされるようになり、責任感から積極的に参加しようという気持ちになった。

問6 この文章の表現の特徴について述べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 複数の人物の視点から場面を構成することで、各人物が自身にとっての弓道を見つめ直す過程を丁寧に描写している。
- ② 本文全体にわたって会話文の中に丁寧語を用いることで、礼儀正しさを重んじる弓道の雰囲気を描いている。
- ③ 弓道に関する専門用語を連ねることで、伝統的な弓道の世界に対して楓が次第に抵抗感を強めていく様子を表現している。
- ④ 現在の場面の間に過去の場面を挿入して楓の心情を描くことで、揺れ動く楓の本音を鮮やかに表現している。
- ⑤ 登場人物同士の素直なやりとりの会話文を多用することで、弓道会のメンバーと楓の心の交流を生き生きと表現している。



5

次の【文章Ⅰ】～【文章Ⅲ】を読んで、問1～問5に答えよ。

【文章Ⅰ】

(注1) 高野御室御 寵童共の師匠の料に、孝博を鳴滝に家つくりて居多給ひて、種々御いとほしみありて、常在・参川に、箏・琵琶をならはせさせ給ひけり。常在には琵琶、参川には箏、各器量も相ひ叶ひて、秘曲とも授けけり。参川に千金調子授けてけりと、富家入道殿聞しめして、孝博を召して、「実にや、千金調子、御室なる児にをしへたんなる」と問はしめ給ふに、孝博申して云はく、「召して聞しめすべし」と云々。之れに依りて御室へ「箏よく弾く童の候ふなる、給ひて聞き候はばや」と申さしめ給ひたりければ、御室興に入り給ひて、参川を進ぜられけり。御前に召して、楽などあまた引かれて後に、千金調子をひかせらるるに、「正体無き僻事共なり」と。童退出せる後、又た孝博を召して仰せられて云はく、「千金調子僻事為る由、申さしむべきなり」と云々。孝博、「今暫く助けしめ御すべし。忽ちにまどひ候ひなむす」と申しけれど、「僻事なり。汝も我れも存生の時、謝し頭はしめずは、後代の狼藉為るか」とて、ありのままに御室に申さるる間、孝博不日に追却に預かり畢んぬ、と云々。

(『古事談』による。)

- (注1) 高野御室——白河天皇しろがわの第四皇子。
- (注2) 師匠の料——音楽の指導をしてもらうお礼。
- (注3) 孝博——人名。藤原孝博。琵琶・箏などの名手。
- (注4) 鳴滝——仁和寺にんなじの北西にある土地。
- (注5) 常在——人名。
- (注6) 参川——人名。
- (注7) 秘曲——特別の家系または技量の者に限り伝授する秘伝の楽曲。
- (注8) 千金調子——秘曲の一つ。
- (注9) 富家人道殿——藤原忠実ただざね。音楽全般に深く通じていた。
- (注10) 云々——ここでは、「という話である」「ということである」の意だと考えられる。
- (注11) 狼藉——混乱。
- (注12) 不日——何日もたたないうちに。

【文章Ⅱ】

荆文王曰、「(注13) 莫諱(注14) 数犯我(注15) 以義違我(注16) 以礼(注17) 与処則不安(注18) 曠之而不穀(注19)

得焉。不C以下吾身(注20) 爵之、後世有聖人、將す以非(注19) 不穀(注18)」於(注17)是爵之五大夫。「申侯

伯善(注20) 持養吾意。吾所欲則先我為之。与処則 **D**、曠之而不穀 **E** 焉。

不以下吾身遠之、後世有聖人、將以非不穀」於是送而行之。

(『呂氏春秋』による。)

(注13) 荆——国名。楚の別名。

(注14) 文王——荆の君主。

(注15) 莫諱——人名。

(注16) 犯——戒める。

(注17) 不穀——王や諸侯の謙遜の意味を含む自称。

(注18) 五大夫——爵位の名。

(注19) 申侯伯——人名。

(注20) 持養——いつまでも守り続ける。

【文章Ⅲ】

晋<sup>(注21)</sup>平公<sup>(注22)</sup>鑄<sup>テ</sup>為<sup>ニ</sup>大鐘<sup>ヲ</sup>、使<sup>シム</sup>工<sup>(注23)</sup>聽<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>。皆<sup>テ</sup>以<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>調<sup>ト</sup>矣<sup>ハ</sup>。師曠<sup>(注24)</sup>曰、「不<sup>レ</sup>調、請<sup>フ</sup>更<sup>ニ</sup>鑄<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>。」  
 平公<sup>ハク</sup>曰、「工<sup>ハク</sup>皆<sup>テ</sup>以<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>調<sup>ト</sup>矣<sup>ハ</sup>。」師曠<sup>ハク</sup>曰、「後<sup>ニ</sup>世<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>音<sup>者</sup>、將<sup>マシ</sup>知<sup>ニ</sup>鐘<sup>之</sup>不<sup>レ</sup>調<sup>也</sup>。臣<sup>ハク</sup>窃<sup>ニ</sup>  
 為<sup>レ</sup>君<sup>ノ</sup>恥<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>。」至<sup>リテ</sup>於<sup>ニ</sup>師涓<sup>(注25)</sup>而<sup>シテ</sup>果<sup>ク</sup>知<sup>ニ</sup>鐘<sup>之</sup>不<sup>レ</sup>調<sup>也</sup>。是<sup>レ</sup>師曠<sup>ノ</sup>欲<sup>セシ</sup>善<sup>ク</sup>調<sup>レ</sup>鐘<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>為<sup>レ</sup>後<sup>ニ</sup>世<sup>ノ</sup>  
 知<sup>ル</sup>音<sup>者</sup>也<sup>ナリ</sup>。

（『呂氏春秋』による。）

（注21） 晋——国名。

（注22） 平公——晋の君主。

（注23） 工——楽工。樂器を作る人。

（注24） 師曠——樂師の曠。「曠」は人名。

（注25） 師涓——樂師の涓。「涓」は人名。

問1 傍線部A 召して聞しめすべし を説明したものととして、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 富家人道殿が孝博を呼び寄せて、秘曲である千金調子を参川に教えたときの様子をお尋ねになってくださいということ。
- ② 富家人道殿が孝博を呼び寄せて、本当に千金調子を教えられるのか孝博に演奏させてお聞きになってくださいということ。
- ③ 富家人道殿が参川を呼び寄せて、秘曲である千金調子を実際に参川に演奏させてお聞きになってくださいということ。
- ④ 御室が参川を呼び寄せて、秘曲である千金調子をどのように孝博に教えられたのかお尋ねになってくださいということ。
- ⑤ 御室が孝博を呼び寄せて、参川が本当に千金調子を演奏できる実力があるのかお尋ねになってくださいということ。

問2 傍線部B 忽ちにまどひ候ひなむず を説明したものととして、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 自分の練習不足のためにでたらめな千金調子しか演奏することができず、参川が後ろめたく感じてしまうということ。
- ② 孝博の指導では千金調子を演奏できるほど箏の腕前が上がりなかつたために、参川が思い悩んでしまうということ。
- ③ 参川の千金調子の指導を孝博に任せたことが誤りであったのではないかと、御室が後悔してしまふということ。
- ④ 箏の師匠として参川にでたらめな千金調子を教えたために、孝博が御室のもとにいられなくなるということ。
- ⑤ 参川にでたらめな千金調子を教えたことを箏の師匠として恥じ、孝博が御室のもとを去ることになるということ。

問3 傍線部C 不以吾身爵之、後世有聖人、將以非不穀。とあるが、その理由として最も適當なものを、次の①～⑤のうちから

一つ選べ。解答番号は 19。

- ① 苒諱が文王を戒め非難しているのは、爵位が欲しいためであることを文王が見抜けなかったと後世の聖人は考えるから。
- ② 苒諱は文王を戒め非難するが、自分自身にとって有益な人物であることを文王が見抜けなかったと後世の聖人は考えるから。
- ③ 苒諱は自分が有能であると考えような傲慢な人物であり、文王が爵位を与えれば後世の聖人が文王を戒め非難すると考えるから。
- ④ 苒諱が自分の身分を考えずに文王に意見を述べることを、後世の聖人があつてはならないことだと戒め非難すると考えるから。
- ⑤ 苒諱は自分の考えが正しいと思ひ込み、文王が有能な人物であることを見抜けずに戒め非難したと後世の聖人は考えるから。

問4 空欄 D・E に入る漢字の組合せとして最も適當なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- |   |    |   |    |   |
|---|----|---|----|---|
| ⑤ | ④  | ③ | ②  | ① |
| D | D  | D | D  | D |
| 安 | 不危 | 安 | 不安 | 危 |
| E | E  | E | E  | E |
| 喪 | 得  | 楽 | 喪  | 楽 |

問5

渡辺さんのクラスでは、【文章Ⅰ】～【文章Ⅲ】を読んだ後で、話合いを行った。次の【話合いの一部】を読み、空欄 X・Y に入るとして最も適当なものを、後の各群の ①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は 21・22。

【話合いの一部】

渡辺さん 「【文章Ⅰ】から【文章Ⅲ】を読み比べて、どのようなことに気づいたかな。」

鈴木さん 「どの文章でも登場人物が遠く先々のことまで見通して現状を正そうとしているね。」

佐藤さん 「そうだね、でも、登場人物が現状を正すべきだと考える理由は異なっているよ。【文章Ⅰ】では、X。それに対して、

【文章Ⅱ】と【文章Ⅲ】では、後世に現れる人物がきつと真実を見抜くと考えているからで、文王や師曠が後世の人物を想定して、その人物の視点から現状を考えているよ。」

鈴木さん 「なるほど。【文章Ⅱ】と【文章Ⅲ】には、より共通点があるということか。」

佐藤さん 「確かにそうだね。でも、現状を正そうとする者と正される者ということで考えると、【文章Ⅰ】と【文章Ⅲ】に新しい共通点が見つけられるかもしれないね。」

鈴木さん 「どういうこと。」

佐藤さん 「【文章Ⅰ】と【文章Ⅲ】では、登場人物が他者の行いや判断を正そうとしているよ。例えば、【文章Ⅲ】では、Y。」

鈴木さん 「そうか。それに対して【文章Ⅱ】では、文王が、他者ではなく自分自身の行いを正しているんだね。」

渡辺さん 「同じような内容の文章だと思ったけれど、登場人物の考え方や言動に注目すると様々な違いや共通点がわかってくるね。」

X

21

- ① 秘曲である千金調子が正しく伝わらないと後世の混乱を招くと考えているからで、富家人道殿の視点から後世を考えているよ
- ② 千金調子を秘曲にすれば後世に正しく伝わらなくなり混乱すると考えているからで、孝博の視点から後世を考えているよ
- ③ 秘曲とされた千金調子が世間に知られれば混乱を招くと考えているからで、富家人道殿の視点から後世を考えているよ
- ④ 千金調子を秘曲であると考えている者がいれば後世の混乱を招くと考えているからで、孝博の視点から後世を考えているよ
- ⑤ 千金調子を秘曲とする理由が正しく伝わらないと混乱を招くと考えているからで、富家人道殿の視点から後世を考えているよ

Y

22

- ① 師曠が、後世に鐘の音が誤っているのは楽工たちの恥となることに触れ、鐘の音は調っているとする平公の判断を正しているね
- ② 師曠が、後世に人々が鐘の音の誤りに気づくことに触れ、鐘の音の誤りを隠そうとする楽工たちの判断を正しているね
- ③ 師曠が、後世に鐘の音を聞き分けられる者が現れることに触れ、鐘の音は調っているとするとする平公の判断を正しているね
- ④ 師曠が、後世に鐘の音は調っていると判明することに触れ、鐘の音は誤っていると考える師涓の判断を正しているね
- ⑤ 師曠が、後世に平公の評判が悪くなってしまうことに触れ、鐘の音の誤りを明白にしようとする師涓の判断を正しているね

